



Book Review

評者:井上智子 国立看護大学校長

研究の育て方

ゴールとプロセスの「見える化」

著:近藤克則/定価:本体2,500円+税/
発行:医学書院/TEL:03-3817-5657



研究とは何かを考え、それをいかに育てていくかを解説した書

「研究の育て方」とは意外でありながら、なるほど!と膝を打つ表現である。

これまで研究の進め方、使い方、読み方などの書物は幾多もあったが、研究を「育てる」という類書は寡聞にして知らない。副題は“ゴールとプロセスの「見える化」”であるが、読み進めるとあたかも研究それ自体が人格をもち育っていく過程を見守る感覚にもなる。

学位論文指導・学位審査(それも博士後期課程)に携わった方はもとより、院生・教員の共通理解と思うが、研究における新たな知見——something new、neues(ノイエス、独語)につながりそうなテーマにたどり着けるかどうかは、学位取得の可否に直結する。そしてそれは、ある研究テーマとじっくりと取り組みながら研究を育て発展させていく過程で得られることが多いと感じている。私自身、論文ゼミで院生発表の研究課題や研究計画を、「研究としては“有り”だけど、学位論文としては“無い”ね」というフレーズをどれだけ口にしたかわからない(言われたほうがはるかにトラウマであろうが)。学位取得を目指すのであれば、研究遂行力は必要条件に過ぎず、研究それ自体を育てる力が不可欠なのだと、本書を前にして大いに得心した。

それでは研究そのものを育てるにはどうしたらよいか、その答えも本書のなかにある。すなわち研究とは

何で、何のために行うのか、よい研究とは何か、研究テーマをどう育てるのか、構想・デザイン・計画立案、研究の実施・論文執筆・発表と続く。すなわち本書の目次構成のまま読み進めればよい。あるいは気になるところからのピンポイント読書もおもしろい。なんだ、研究関連図書と同じではないかと思われるかもしれないが、その内容は著者自身の膨大な研究経験と、60人余にわたる院生指導の賜であり、コラムも含めどの記述も最新かつ適切で実に役に立つ。

ちなみに、著者は『健康格差社会——何が心と健康を蝕むのか(医学書院, 2005. 社会政策学会賞受賞)』をもつ。格差社会を「収入や財産によって社会に階層化が生じ、階層間の遷移が困難である状態、閉鎖性が強く社会問題の1つ」として取り上げ、この言葉を切り口に、格差社会がもたらす人々の健康被害が、時に「死」をも意味することを訴えた。そのような社会的な視点と、著者を形づくったという14年にわたるリハビリテーション専門医としての実践、そしてその後の研究者、研究指導者としての積み重ねが本書の基盤であることは間違いないだろう。その言葉選び(もはや言葉創りともいえる)の巧みさが、本書の一文一文に磨きをかけている。

研究を学ぶ者、研究で学ぶ者、そして研究を指導する者すべてにとって興味深い、そんな1冊である。